

『万葉集』の「雨間」の表現上の効果

福嶋俊彦

一

『万葉集』において「雨間」を歌中に持つものは次の四首である。

大伴家持雨日聞雲公鳥喧歌一首	宇乃花能過者借香	渡	大伴家持秋歌四首	久堅之	雨間毛不置	(卷八・一四九一)
雲鶴鳴首去奈流	雲鶴鳴首去奈流	（卷八・一五六六）	雨間毛不置	早田雁之哭	早田雁之哭	（卷十・一九七一）
國見毛將為乎	國見毛將為乎	（卷十・一九七一）	毛不置	毛不置	毛不置	（卷十・一九七一）
故鄉之	故鄉之	（卷十・一九七一）	雲鶴鳴首去奈流	早田雁之哭	早田雁之哭	（卷十・一九七一）
花橘者散家武可	花橘者散家武可	（卷十・一九七一）	是、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間	是、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間	是、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間	（卷十・一九七一）
宿可借益	宿可借益	（卷十・一九七一）	毛不置雲鶴鳴首去奈流早田雁之哭、とある、全同じ、	毛不置雲鶴鳴首去奈流早田雁之哭、とある、全同じ、	毛不置雲鶴鳴首去奈流早田雁之哭、とある、全同じ、	（卷十・一九七一）
客爾西者誰里之	客爾西者誰里之	（卷十・一九七一）	十二に、十月雨間毛不置客爾西者誰里之間宿可借益、	十二に、十月雨間毛不置客爾西者誰里之間宿可借益、	十二に、十月雨間毛不置客爾西者誰里之間宿可借益、	（卷十・一九七一）
月 雨間毛不置	月 雨間毛不置	（卷十・一九七一）	とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて	とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて	とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて	（卷十・一九七一）
客爾西者誰里之宿可借益	客爾西者誰里之宿可借益	（卷十・一九七一）	意異れり、又十卷に、雨間開而國見毛將為乎、とある	意異れり、又十卷に、雨間開而國見毛將為乎、とある	意異れり、又十卷に、雨間開而國見毛將為乎、とある	（卷十・一九七一）

「雨間」は、今日「雨の降り止んでいる間。晴れ間」の意とし用いられている。しかし、右に挙げた『万葉集』中の四首に關しては、今日と同じ意をもって解するには問題があるようである。

『万葉代匠記』精撰本において、一四九一の歌の条で、

「雨間毛不置トハ、雨ノ降間ヲモサテオカスナリ」と述べ、「雨間」を「雨ノ降間」と解している。また、『万葉集古義』では一四九一の条において、この四首に対し次の様に述べてある。

「雨間毛不置は、雨客間も息すの意なり、この雨間は、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間毛不置雲鶴鳴首去奈流早田雁之哭、とある、全同じ、十二に、十月雨間毛不置客爾西者誰里之間宿可借益、とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて意異れり、又十卷に、雨間開而國見毛將為乎、とある

も、晴間をいへるなり」

『古義』において「雨間」は「雨のふる間」と「雨の晴間」と二通りに解してある。『万葉集全釋』において同じく、一四九一の歌の条に次のように述べられている。

「雨間には雨の降つてゐる間と雨の晴間との二様の用例があるから、その場合を考へて解釈しなければならない。ここは前者で、雨の降つてゐる間もかまはずの意」

このように「雨間」に歌によつて違つた意を付し解しているのである。それも「雨の降つてゐる間」と「雨の降り止んでいる間」と全く相反する意を与えていた。

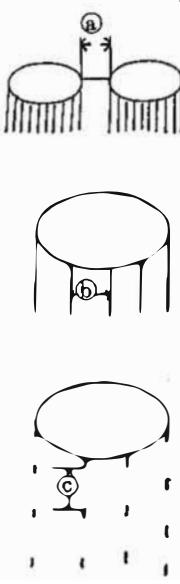
同一の語に対し全く相反する意を付し解釈するはどういうことなのであらうか。

そこで本稿においては、「雨間」を持つ、一四九一、一五六六、一九七一、三二一四の四首を総合的に考察することによって、「雨間」の解釈上における問題を究明して行こうと思う。

まず「雨間」とはどのような空間であるか考えてみた

い。「雨間」もまた『万葉集』にある「雲間」「人間」「木間」「垣間」と同類の語と考えられる。そうすると例え「雲間」が「雲と雲との間」の空間をさすことから、「雨間」もまた「雨と雨との間」の空間をさす語であると考えられる。

では「雨と雨との間」とはどのような空間であるか。私はその空間を考え図に描いてみた。左の図がそれである。



- 60 -

図 ④⑤⑥を「雨間」と考えた。④の空間は、雨雲と雨雲との間、一時雨の降り止んでいる空間である。⑤の空間は、線状に我々が視覚でとらえるものを雨としその間の空間である。⑥の空間は、雨粒と雨粒との間を「雨間」の空間としてとらえたものである。

「雨間」を④の空間と考えた場合、「雨間」は雨の降り止んでいる状態を指すことになる。しかし⑤⑥の空間を「雨間」と考えると、全体の状態からして、雨は降っているといえる。「雨間」が「雨と雨との間」の空間を意味するものであつても「雨」をどのように認識するか

によってその空間の様相は違つたものになってくる。「雨間」が「雨と雨との間」を指す語であることにちはちがないが、それがすぐ「晴れ間」と結びつくとは限らないのである。

このように「雨間」がどのような現象を意味するか明確に判断することは難しい。だが④⑤⑥の「雨間」に関して共通しいえることは、「雨」がどのような状態であれ、雨と雨との隔りを指しているということ、そしてその隔りは時間的空間的において短いものであるということである。私はこの「雨と雨との隔りの短さ」に注意したい。それはこの点に「雨間」のもつ重要な意味があると思われるからである。

三

「雨間」の現象面についての意を追うだけでなく、表現上の役割についても考えなければならない。そこで、「雨間」を持つ四首中一四九一、一五六六、三二一四の三首に共通する表現「雨間毛不置」を中心にして考察の手をのばしていくと思う。「雨間」を単独に考えるよりも、一つの表現の中の構成要素として考える方がよりも、その生きた意味をとらえることができると思う。

まず「雨間毛不置」の中で「雨間」を存在させ位置づける「不置」について考えてみたい。万葉集の中から「不置」を持つ表現を挙げ考えてみる。

過二辛荷鳴一時山部宿祢赤人作歌一首

味沢相妹目不敵見一而數細乃
皮纏作流舟一真梶貫吾榜來者
過伊奈美媛辛荷乃鳴之鳴際從
山乃曾許十方不見白雲毛千重爾成來沼許
伎多武流浦乃盡往闇船乃崎々
曾吾來玉緒之間毛不置欲見吾思妹者家遠在而
客乃氣長弥

(卷十一・二七九三)

右の二首において「不置」の持つ役割をみてみたい。九四二の歌においては「隈毛不置」が挙げられる。「隈」は「物に隠れて見えない所」の意である。「隈毛不置」は「どんな場所でさえ」という意にとれる。また歌全体の意は「妻に別れて その手枕もせず 桜皮を巻いて 作った舟に櫂を通して 潛いで来ると 淡路の

野島も過ぎ　印南つまの　辛荷の島　島の間から
故郷の方を見ると　青山のどのあたりともわからず　白
雲も　千里に重なって來た　滣ぎめぐる　浦のすべてに
行き離れる　島の崎ごとに　どこへ行つても　思いつ
づけて來ることだ　旅の日数が長いので」となる。

「隈毛不置」は下の句の「憶曾吾来」を強調する役割
を果している。どのような所へ行こうと変わることなく
私は故郷を思う、という意になる。「不置」はその中で
「隈」を否定することによって想いの強さを表現してい
る。

次に二七九三の歌である。この歌においては「間毛不
置」を擧げる。「間」は「絶え間隔り」を表わし、「間
毛不置」は「絶え間なく」の意で、事柄の連続・継続
を表わす。この歌の解釈としては「絶えず逢いたい」とわ
たしが思うあの娘は家が遠くて」となり、この中で「間
毛不置」は、恋しい人を思う気持ちの絶え間なさ、想い
の強さを表わしている。「不置」は「間」を打ち消すこと
により、恋する想いの強さを表現している。また、想
いの強さを表現する点で「隈毛不置」と「間毛不置」は
共通するものであると思う。

それから二七九三の歌の「玉緒」に注意したい。私は
この「玉緒」を単に枕詞とし技巧上の無意味な語とは考

えたない。表現上なんらかの意味をもつものと考えた
い。「玉緒」の元來の意味は「一本の緒に玉を貯めた飾
り」である。このことから考へて、この歌において「玉
緒」は、緒に貯いた玉と玉とのほんの少しの隔りを表わ
し、それが「間」に懸り、「間」所謂「隔り」の短さを
強調する役割を持つていると考えられないだろうか。

「玉緒」が附りの短さを表現するならば、「間毛不置」
は恋する人に対する想いの絶え間のなさを一層よく表わ
し得る。

これまでには「不置」が表現上どのような役割を果して
いるかを考へて來た。九四二・二七九三において「不置」
は「隈」「間」を否定することによって、想いの強さを
表現するものであった。このことからして「雨間毛不置」
の「不置」にも同様な役割があるのではないかと思える。
「雨間」に「隔り絶え間」を表わす意があるならば「雨
間」は「不置」によって否定され事柄の連続を表わす表
現とみることができる。「雨間」が單に現象を指すので
はなく表現の中では意味を持つものであると考えられない
か。そうすると二七九三の「玉緒之間毛不置」も「雨
間」を持つ四首の歌と重要な関わりを持つものになると
思う。

四

次に閑連づけ考へるべきものに「間」がある。『万葉集』において「間」は「アヒダ」、「マ」と読まれてゐる。そこでまず、「間」と読まれてゐるものの中で、前述の「不置」と同様、否定する語とともに用いられてゐるもの、「間無し」について、『万葉集』中より挙げ考へてみたい。

山路道之 鶴乃浦廻尔 縁浪 間無牛 吾戀 卷者

無間 懸爾可有牟 草枕 客有公之 夢爾之所見
(卷四・五五一)

風絶痛甚振浪能 間無吾念君者 相念藍香
(卷四・六二一)

大伴之 三津乃白浪 間無我戀良苦乎 人之不知久
(卷十一・二七三七)

貞能汭尔 依流白浪 無間思乎如何 妹尔難相
(卷十二・三〇二九)

(卷十一・二七三七)

右の五首の「間無し」について考へてみる。この五首の「間」についていえることは、全て「隔り・絶え間」

を表わしていることである。例えは、五五一の場合、解釈すると、「大和道の島の浦辺に寄せる波のように絶え間もないでしよう私の恋は」となる。このように「間」は、「絶え間」を意味している。そして「間無し」となることによつて「絶え間」は否定され、恋しい人を思ふ気持ちの「絶え間のない」様を表わしているのである。このことは他の四首においても同様にいえることである。

次に「間」と読むもので、「間」の意味を考える上で重要な閑わりを持つと思われるものを挙げる。

天皇御製歌

三吉野之 耳我嶺尔 時無曾 雪者落家留 間無曾 雨
者零計類 其雪乃 時無如 其雨乃 間無如 雨毛不
落 念乍叙來 其山道乎
(卷一・二五)

大伴坂上郎女從竹田庄贈二女子大娘一歌
打渡竹田之原尔 鳴鶴之 間無時無 吾戀良久波
(卷四・七六〇)

(卷十二・三〇八八)

戀衣 著惣乃山尔 鳴鳥之 間無時無 吾戀良苦者
(卷十二・三〇八八)

右の四首は「間無し」を用い且つ「時無し」を持つ歌である。「間無し」と「時無し」を対比させることによつて、「間」の意味を考えてみたい。

まず二五の歌を解釈してみると「吉野の耳我の嶺に絶え間なく雪は降つてゐる。絶え間なく雨は降つてゐる。その雪の絶え間のないよう、その雨の絶え間のないよう、道の角々一つ残さず、思いに沈みながらやつて来る。その山道を」となる。意味の上では「時無し」「間無し」も同様に「絶え間なく」の意としてとらえられる。他の三首においても同様である。

しかし「時」と「間」の語には何んらかの相違があると思える。この点について沢瀉久孝氏の『万葉集注釈』では次の様に考察されている。

「時なく」も「間なく」も結局同じ事になるが、少し委しく云へば「時」はある定つた時、即ち春は桜の咲く「時」であり、秋は楓の紅葉する「時」であるわけになり、「間」はその「時」と「時」との間、即ち雨の暫くやんでる間が「雨間」(十二・三二一四)であり、人のうるさい疊が少しとだえている

間が「人言の繁き間」(十一・二五六一)であるわけになる。この「時」と「間」との関係は今の人にも理解されるところであり、本来は「時なし」と「間なし」とは表と裏とのやうに使ひ方が違つてゐるが、結果においては、しそつちゅう、のべつに、といふ事になるわけである。

このように『万葉集注釈』では「時」と「間」の相違が述べられている。「時」が一定の時点を表わすのに對し「間」は二つのものにはさまれた空間を指すものとされている。そしてその空間は「隔り絶え間」所謂事柄の中断を意味するものだと考えられる。また『万葉集注釈』では「雨間」にも同様な意味があると述べてある。「雨間」にもそうすると事柄の中斷、「隔り絶え間」を表わすことができるということになる。「間無し」がその「隔り絶え間」を否定することによって事柄の連續を表わすものなら「雨間毛不置」も「雨間」という「隔り絶え間」を「不置」によって否定することにより事柄の連續を表わすものと考えられる。

する語をともなつた表現についてみてきた。これからは「間」を「置く」、また「雨間開而」の様に「間」を「開ける」という肯定的な意味を持つ語とともに用いられた「間」について考えてみる。

まず「間」を「置く」というものを『万葉集』より挙げてみた。

みる。肯定的意味を持つ「置」をともなつた「間」であるが、歌全体の解釈からすると「間」は否定されていることがわかる。またここにおいても「間」は「隔り、絶え間」を意味し、そしてその「隔り、絶え間」は「間毛不置」「間無し」の場合と同様否定され、恋しい人を思ふ気持ちの絶え間のない様を表わしている。

それから、三七八五についてであるが、この歌の場合は逆に「間」に存在することが求められている。だがこの「間」もまた恋しい人を思う気持ちを強く表わす役割を果していいる点において、二七二七・三〇四六と共通する。

（卷十一・二七二七）
左佐浪之 浪越安瀬仁 落小雨 間文置而 吾不念國
（卷十二・三〇四六）
保登等藝須 安比太之麻思於家 奈我奈氣娶 安我毛布
許己呂 伊多母須敵奈之
（卷十五・三七八五）

この三首において特に注意する表現として三〇四六の「落小雨 間文置而」の箇所をあげたい。この「落小雨」は、前に挙げた二七九三の「玉緒」とは逆に、「間」の長いこと所謂隔りの長いことを表わすものと考えられる。だが「落小雨」もまた、「間」の長短は別として、「玉緒」と同様「間」に懸り、その意味を強調するものであると思える。

次は、「開」を伴つた表現「間開」について考えてみる。『万葉集』中、「間開」の例は次の二首である。

右の三首の解釈は次の様になる。二七二七「酢蛾島の夏身の浦に寄せる波のように間をあけて、わたしは思つたりはしません。」・三〇四六「奥浪の波越す安瀬に、降る小雨のように間をあけて、わたしは思つたりはしません。」・三七八五「ほととぎすよ、間を少し置け、おまえが鳴くとわたしの心はどうにもしかたがない。」

まず初めに、二七二七と三〇四六の歌について考えて

（卷十一・二四四八）

白玉 間開乍 貫緒 細依 夏身乃浦 依浪 間文置

吾不念君

（卷十二・三〇四六）

落小雨 間文置而 吾不念國

（卷十五・三七八五）

右の歌の解釈は「白玉の間を置いて通した緒でも、くぐり寄せると、また合うというのに。」となる。「間開」とは「隔りをつくる。」という意にとれる。ここにおいても「間」は「隔り」を意味するものとして用いられており。また「^{しら}^よ玉 間開乍」の「白玉間」についてであるが、これは前に挙げた三七九三の「玉緒之間」と同じ形の表現と考えられる。「白玉間」も「玉緒間」も、玉を緒に通した時にできる玉と玉との間を指している。

ただ「玉緒之間」はその「間」の短かいことを表わすのに対し「白玉間」は「間」の長いことを表わしている。この点においては、三〇四六の「落小雨間」と共通するものである。そして「白玉間」「玉緒之間」「落小雨間」に共通する点として、三つの表現どの「間」も否定されることによって恋しい思いを強調しているといふ点があげられると思う。

この章においては「間」を、「置」「開」という肯定的意味をもつ語とともに考へてみた。結果としてわかったことは、「間」には前章からの考察と同様「隔り・絶え間」の意味があるということ、そして「置」「開」も歌全体からみると否定されているということである。ここにおいても「間」は否定されることによつて事柄の連続を表わしていた。

六

この章ではこれまでに考えたことを整理してみる。

まず、「間」についてである。「間」には「隔り・絶え間」という意味があること。そしてその「隔り・絶え間」は極めて短い時間なり、空間を示すものとして用いられている。「雨間」の「間」にも同じことがいえる。

次に「間」と「不置」「無し」との関わりであるが、この場合「間」の持つ「隔り・絶え間」の意は否定され、そうすることによつて事柄、特に恋しい人に対する思いの絶え間のない様を表わすのである。また、「置」「開」とともに用いられても歌全体の意から「間」は否定され、「不置」「無し」の場合と同じ意を表わす。

そして「玉緒之間」「落小雨間」「白玉間」と「雨間」の関りである。「雨間」の「間」にも他の表現の「間」と同様「隔り・絶え間」という意味が認められるということから、「雨間」の「雨」は「玉緒」「落小雨」「白玉」と同じように「間」に懸り、その「隔り・絶え間」を強調するものであると考えられる。こう考えると「雨間」が「隔り・絶え間」を表わすということがより明確なものになる。「雨間」は単に現象を表わす語ではない

と私は思う。「雨間」は事柄の隔り・絶え間を意味するものであると思う。「雨間毛不置」「雨間開而」の様に一つの表現の中でその本来の姿を現わす語であると思う。「雨間」の現象面の意味だけを考えることは、単に解釈の混乱を招くものであると思われる。

今までに考えたことを踏まえ次の章では、実際に「雨間」を持つ四首、一四九一、一五六六、一九七一、三二

一四の歌にあたることにより「雨間」の持つ意味をより明確にしてゆきたい。

七

大伴家持雨日聞_ニ雲公鳥鳴_一歌一首

宇乃花能 過者惜香 雲公鳥 雨間毛不置 從此間一
喰渡（一四九一）

この歌において、詞書の「雨日」からして「雨間」を、「雨の降っていない間」とするのはおかしい。だが單に「雨間」を、「雨の降っている状態」とだけ解釈することは、この歌全体を平板なものにしてしまうようと思う。また、この歌の主体である雲公鳥と雨との関わりも問題である。従来の解釈通り「雨間」を「雨の降っている

間」と解すると、鳥と雨との関係がおかしくなるように思う。鳥が雨の中を飛ぶであろうか、仮に飛ぶと考えて、雨の中を飛ぶ雲公鳥に対し、作者家持は何を感じ思ったのか、雨と雲公鳥と作者この三者の関わりがこの歌の重要なポイントである。

そこで、これまでに考えたことを使ってこの点について考えてみる。

「雨間毛不置」を、事柄の絶え間のない様を表わす譬喩的な表現として考えてみる。「雨間」の「雨」を、前述の「玉緒」「落小雨」「白玉」と同様に「間」に關り、その意味を強めるものと考え「雨間」を「極めて短い隔り、絶え間」とし、そして「雨間毛不置」を「極めて短い隔りもなく」と考えてみる。すると、歌全体は「卯の花が散るのが惜しくてなのか、雲公鳥が、雨と雨との短い間もおかず、絶え間なく、ことを鳴き渡ってゆく。」と解釈でき、雨と雲公鳥と作者の関わりが無理のないものとして表われてくると思える。

「雨間」の現象的意味を離れ、一つの表現の中での効果を考えることが、歌全体を生きたものにすると思える。同様なことは、次の一五六六の歌の場合においてもいえると思う。

久堅之 雨間毛不置 雲間 鳴曾去奈流 早田鷦之哭

(一五六六)

この歌においても「雨間毛不置」を単に現象面の意味でとらえるよりも「絶え間なく続く」という意味を持つ譬喩的な表現と考へることによつて、雁がしきりに鳴いて行く情景が鮮かに浮ひあがつてくる。間をおかず鳴くのは雁の意志であり、その点で「置」という他動詞表現が生きる。

次に三二一四について考へる。

十月 雨間毛不置 零爾西者 誰里之 宿可借益

(三二一四)

従來の説においては、この歌の「雨間」は「雨の降り止んでいる間」とされている。ここにおいても「雨間」の現象的意味に重点がおかれて解釈されて来ている。「雨間」の現象的意味については、本稿の最初で述べたように明確な判断をくだすことは難しい。この歌においても前の二首の場合と同様、「雨間」を一つの譬喩的な意味を持つ語と考え、「雨間毛不置」を十月の時雨が「絶え間なく続く」という一つの意味を持つ表現と考へるべき

だと思う。

「雨間」の現象面に重点を置き追求することは、単に解釈の混亂を招くものであつて、その歌における「雨間」の効果を減退させるものであると思う。

最後に、「雨間開而」を中心に一九七一の歌について考へてみたい。

雨間開而 國見毛~~将~~為乎 故郷之 花櫻者 散家武可
聞 (一九七一)

四首中この歌においてのみ「雨間」は「開」と結びついている。

「雨間開而」の表記について『万葉集全註釈』は「雨間開而」とするが、諸本の状態から考えてそう読むのは無理があり、やはり通説のように、「あままあけて」と読むのが適切である。その場合「開」では他動詞であるから、「晴れ間があく」と解釈するのはおかしい。「雨間」をあけるのは、この歌の主体である作者自身でなければならない。「雨間」は作者の意識によつて開けられるのである。

「雨間」を前述の@⑥⑦のどの空間と考へるにせよ、雨と雨とのごく短い空間であることには違いない。それ

開けるとは、本来しげしげとする國見を、少し間を開け

てすることであり、そしてその少しの間國見をしなかつたことで、故郷の花橋が散ってしまったのではと作者はいぶかる。ここにおいても「雨間」は行為の絶え間を表わしていると考えられる。

「雨間」を開けるのは作者の意識によって開かれる点と「雨間」は行為の絶え間を表わすという二つの点がこの歌の解釈の上で重要な意味を持つと思う。「雨間開而」も「雨間毛不置」と同様、一つの譬喩的な役割を持つもので、その中において「雨間」は意味を持ち得ると考えられる。

この四首を考察することによって「雨間」の持つ意味がより明確になったと思う。やはり、「雨間」には事柄、行為の絶え間を表わす意があり、それは「雨が降っている間」か「雨が止んでいる間」かというような現象面の意味より歌との関わりにおいて重要であると思える。

「雨間」は一つの表現の中に組み込まれることによってその役割を果たすものである。

(本学三年在学)

所 見

この論文は、『万葉集』に見える四例の「雨間」が「雨の降り止んだ間」「雨の降っている間」という二つの相反する解釈がされているのに疑問を感じ、それを統一した立場で説こうとしたものである。歌の内容によって、同じ言葉が二様に解釈されるのは確かに異様であり、福島君は、その点にナイーブな感受性をもって肉迫する。

表現は、まだ未熟であり、論証にももたつきが見られるが、その言わんとする所はわかる。それは要するに「雨間」の解釈に、その現象面を見ず、表現性を重視すべきだというのである。その分析の方法は、「雨間」を單独で捉えず、「雨間を置かず」とか「雨間を開けて」とかいったフレーズで考え、それと「間無し」「限も置かず」「間も置かず」といった、「間」を否定してゆく一連の表現形式の関係において意味を決定してゆくやり方である。それは、広く言えば、言語の意味とその運用の問題にかかわる。

そうした福島君の論点を補うべく、若干の説明を加える。「雨間も置かず」という表現の中で確認して置かねばならぬのは「置く」の基本的な意味である。仮りに『時代別国語大辞典上代篇』の分類に従えば、それは「①降りとどまる②物を置く、供える、設ける③さしおく、

放つておく④残して置く、後に留め置く⑤時・空間など
をへだてる」といった意味に分けられる。これらは、要
するにある物によって一定の空間を占めることをいう。
「雨間」を雨と雨との間とするならば、それを置くとは、
天候がその空間を設けることである。家持の一四九一の
場合、「鶴公鳥雨間も置かず」を文字通りに解すれば、
鶴公鳥が雨と雨との間（晴れ間）を置かずとなり、意味
が通じなくなる。そこで沢瀉久孝氏は、雨の降る間も置
かずの意で、「家持の誤用」（新釈下巻七五頁）とされ
たが、佐伯梅友氏は「万葉集小考 雨間」（『万葉語研
究』昭和三十八年四月）において、「事実は消極的に雨
の止むのを待つのではないか」といふのも、同様に事実としては雨のはれまで
待たずに、降つてゐる中をかまはず飛ぶのであるが、い
ひ方としてかういふいひ方をしたとも考へられるであら
う。」と論じ、「雨間を置く」を「雨間開而」と同じよ
うに、雨の晴れ間を待つ意とされた。しかし、「置く」
は、既に見たように、何かが一定の空間を設けることで
あり、待つ意はない。この場合、「雨間を置く」の主体
は、あくまで鶴公鳥であり、その意志として雨間を置か
ず鳴き渡るのでなければならない。

この点を福島君は、「間無く」や「間も置かず」とい
う表現から推して、譬喩を加味して説く。即ち、情景と
しては、雨中を鶴公鳥が鳴き渡るのであるが、雨間を置
かず降る雨の短い間も置かず、間断なく鶴公鳥が鳴き渡
るさまとみる。片恋の鳥が間断なく鳴き、それが恋する
男の心を悩ますという趣向は、卷三・三七二の赤人の
「鶴公鳥能 間無数鳴まくばね：其鳥乃かたちのを 片恋耳かみのみみ二……念曾吾ねんそご為流ゑりゆ」
の歌に見られる。恐らく、一四九一の歌の卯の花は、鶴
公鳥の恋人に見立てられていて、それが過ぎる、つまり
妻にする時期を失することを惜しみ、鶴公鳥が雨中を鳴
きながら飛ぶといった寓意がこめられているのであろう。
同様に、一九七一の「雨間開けて」も、単に雨の晴れ
間を待つといった消極的な態度ではなく、男が何かの理
由で間を開けて因見をせざるを得なくなり、その間に散
るかもしれぬ花柄に懸念を示したものである。それが譬
喩的であることは、例えば、卷十一・二四四八の「白玉
の間開けつづ國見せば」と言い直してみれば納得がい
くだろう。この場合は、実際に五月雨が晴れ間を作る、
そのように間を開けてというように、現実を作者の意識
に取り込んでいるとみるべきであろう。